

IV 地域体験学習に参加した学生の意見

学生のこれまでににおける農業・漁業との関わり

1. 本体験プログラムでは、地域体験学習の後に参加した学生に対して授業アンケートを行っている。体験学習の受入先に対する情報の提供と体験プログラムの改善に向けた意見の集約が目的である。アンケートでは、以下3つの視点から学生の回答を得た。第1に、学生がこれまでに経験した農業や漁業との関わり方について、第2に参加した地域体験学習に対する学生の授業評価、第3に地域体験学習を通じた学生の農業、漁業、農山漁村に対する意識や関わり方の変化についてである。

参加した学生のプロフィール

2. 本年度、生物生産学部に入学者は105名である。本体験プログラムは1年生の必修科目である教養ゼミに組み込まれており、全員が参加している。

授業アンケートは、97名から回収し、無回答は13名だった。図1に示したように、参加した学生の男女比では、回答した学生の男女比は6:4である。

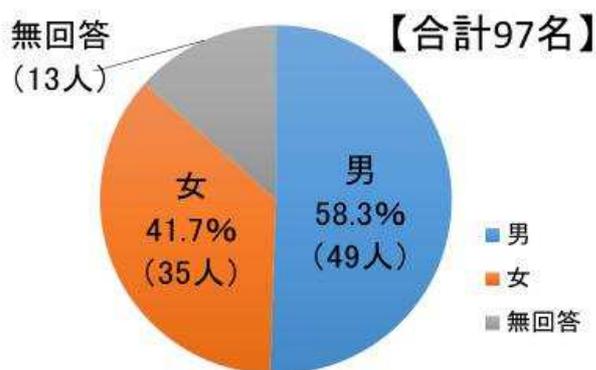


図1 参加した学生の男女比

注: 男女比は、無回答を除いた数で計算。

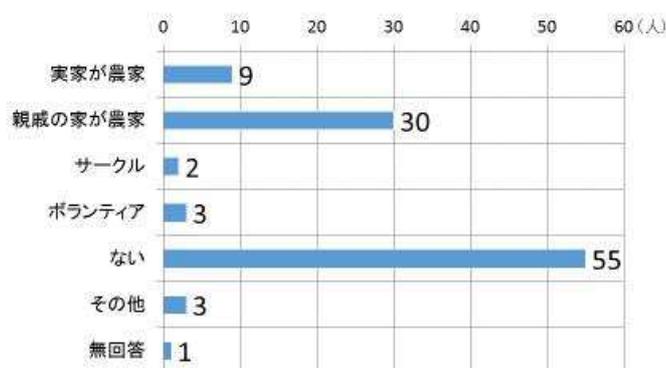


図2 授業以外の農業との関わり(n=97)
※複数回答

資料: 図1に同じ

3. 図2は、学生が今回の地域体験学習以外で農業との関わりがあるか調べたものである。

約1割の学生は実家が農家であり、3割の学生は親戚の中に農家がいる。学生の半数以上は、授業以外で農業との関わりがない。広島大学全体で見えた場合、他学部と比べると第一次産業と関わりのある学生や興味を持っている学生は比較的多いといえる。

4. 学生が今回の地域体験学習以外に農漁業体験をしたことがあるかを調べたものが図3である。

複数回答だが、小中高での体験学習を経験した学生は約5割、実家や親戚の家で手伝いをした経験のある学生は約4割であった。その他、地域活動や修学旅行、研修旅行、ボランティアなどで農漁業体験をしている。これまでに農漁業体験をしたことがない学生は18名のみであった。



図3 農漁業体験の経験(n=97)
※複数回答

資料: 図1に同じ

5. 2000年以降、小中高の学習指導要領に総合的な学習の時間が設置された。これを受けて食農教育を学習に組み込む学校が増えている。今年度参加した学生は、全国的に食農教育が普及した時期の世代である。学生ごとに農漁業体験の内容に差異があると考えられるが、参加した学生の多くはこれまでに農業や漁業と何かしらの関わりをもっている。

地域体験学習に参加した学生の感想

地域との接点を築く貴重な一歩

1. 参加した学生に今回の活動を評価してもらったところ（図4）、「とてもよかった」が約6割、「よかった」が約4割であった。ほぼすべての学生が、今回体験した活動を高く評価している。

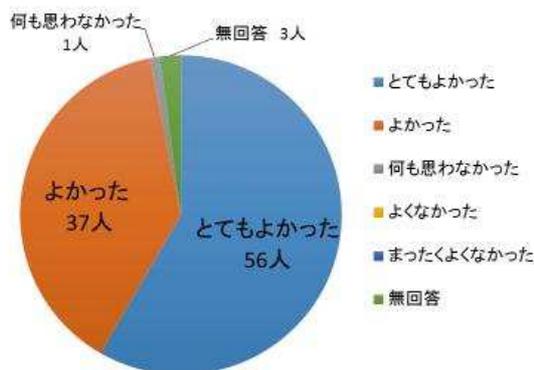


図4 今回の活動をして良かったと思うか (n=97)

資料: 図1に同じ

2. 次に、今回の活動体験でよかったことは何か、複数回答で評価してもらった（図5）。学生は、「自然の中で活動ができた」、「体験が楽しかった」、「地域の人のお話がきけた」という順に回答している。地域志向型の人材を育成する本プログラムの第一段階において、学生が地域との接点を好意的に受け止めることができたことと評価することができる。また、「地域の人のお話が聞けた」という回答も多く、今回の活動は学生に地域に対する積極的な興味を抱かせることにつながることができた。

3. また、「友達と一緒に活動ができた」という回答が多く、入学後の仲間作りに対していくらかの効果があつたものと思われる。一方で、「先生と一緒に活動ができた」という回答は少なく、今後の検討課題である。



図5 今回の体験活動で良かったことは何か
※複数回答、(n=97)

注: ()内の数値は、うち最もよかったと答えた人数

資料: 図1に同じ

活動内容のバランスが課題

4. 今回の体験活動で悪かったことについては(図6)、半数はないという回答であった。悪かった点として一番多かったのは、平日の授業に加えて休日にも授業が加わったことであった。また、活動時間が短い、長いという意見もでている。内容が詰め込みすぎでもっとじっくり活動したいという学生や、活動内容が少なかったり、移動時間が長かったりして疲れたり、飽きてしまったりした学生がいたものと考えられる。活動内容や課題の設定については、今後の改善が必要である。



図6 今回の体験活動で最も悪かったことは何か
※複数回答、(n=97)

資料:図1に同じ

地域体験学習を通じた学生の意識変化

地域とのより深い関係を求め始めた

1. 地域体験学習を通じて、学生が農業や漁業に対して印象は変わったかを調べたものが図7である。「とてもよくなった」、「よくなった」、「変わらずよい」という回答で100%を占めた。この結果は、生物生産学部の学生がもともと第一次産業に対して興味関心が高いことに起因している。今回の活動を通じて、より第一次産業や地域に対して前向きな印象を持った学生が半数以上いたことは、学生の今後の活動意欲につながるよい結果であった。

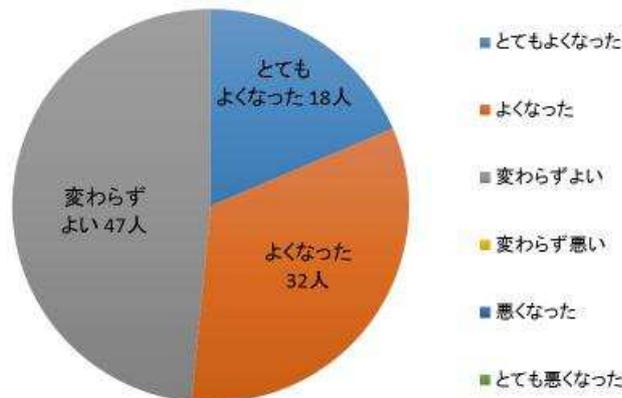


図7 農漁業・農漁村への印象は変わった (n=97)

資料:図1に同じ

2. また、今回の活動の他にしてみたい体験はあるか調べたのが図8である。回答方法を複数回答にしたところ、積極的な回答を得た。「民泊体験」、「アウトドア」、「伝統工芸・ものづくり」、「農林漁業体験」、「地元・伝統料理体験」に多くの回答を得た。学生は今回の活動を通じて、地域の生活や伝統文化の理解を通じたより深い関係の構築を求めている。専門的興味をもつ学生は、今回よりも実践的な農林漁業の作業体験を求めていることがわかった。これらは、来年度以降のプログラム作成の参考にしていきたい。



図8 他にもしてみたい体験はあるか
※複数回答、(n=97)

資料: 図1に同じ

農山漁村を舞台に活躍する学生の育成にむけて

3. 最後に、参加した学生が今後どのように農山漁村に関わりたいかを調べたものが図9である。「関わりたくない」という学生はおらず、今後も何らかの関わりをもちたいと感じている。農山漁村の外部者としての立場から、「遊びに行く」という回答がもっとも多かった。外部者ではあるが、「体験活動に参加」、「地域の行事に参加する」といったより具体性を伴う関わり方にも一定の回答を得ている。



図9 今後どのように農山漁村に関わりたいか(n=97)
※複数回答

資料: 図1に同じ

「農山漁村に関する授業を履修する」という回答もみられ、実体験から学問的知識を求める学生もいる。また、少数ではあるが、農山漁村を将来の移住先や仕事場にしたいと感じた学生がいた。

4. 地域志向型人材育成の最終的な目標の一つが、農山漁村に関わる仕事選びをし、定住を希望する人材であるならば、今回の活動は地域との接点をつくるという第1のステップをふむことができた。今後、学生と地域との継続的な関係構築が、地域の行事や活動に参加し地域の人たちと深い関係を築く、という第2のステップにつながっていく。学生はそれぞれに異なる生き立ちを持つため、必ずしも体験作業をした地域に定着するものではないが、それぞれが志向する地域を舞台に活躍する人材が育つよう、地域と大学がともに長い目で学生を育てていく方法を考えていく必要がある。